

第六章 脱獄執鬼行

1

地を揺るがす轟きの音を聞いた。

海氷が身を揉み、軌りの音を立てた。南の風にあおられて砕け散って行く。

思えば、ここ網走刑務所の第四舎二十四号舎房に叩き込まれたのが、昨年四月二十三日、すでに一年が経過していた。

はじめて、獄中から、白い魔物が海中に引きずられて行く時の悲鳴の声を聞いた。

地吹雪の切り込んで来る風音のかわりに、空高くで舞う、ひひゅーんと鳴る南風の、力に充ちた声を聞いた。

白岩由吉には見えていなかったが、海中に没した氷塊の根氷の部分がもう動き始めていたのだ。

氷塊は溶け始めた海水のために、海面と接している部分がくびれ、削りとられていた。水がぬるんでいたのである。

崖っぷちには雪をかぶりながらも黄色い福寿草の花が、生命のしるしを見せるかのように花を咲かせた。

突風が吹いた。

ぎしぎしと身をすり合った破船の群れが、一挙に、オホーツクの海へと旅立って行

く。白い世界は想像できても、流水群の、静かに牙を剥こうとする怒りの姿は彼には見えてはいなかった。

ただ、怒れる者の咆哮の声を聞き、壊れる寸前の破船の呻きの声を聞いただけだった。いま、突如として、大氷塊群は崩落して行く。

あくまでも獄舎の中からは、流水が旅立つ時の凄まじい音しか聞えなかったが、思わず知らず、彼は身震いした。とうとうと激流の渦巻く大河の光景を思い浮かべた。

流水群にすんでのところに船体をぶつけるところであったカニ工船での恐怖の体験のことも思い浮かんだ。

たしかに海は立ち騒いでいた。だが、怒濤の音は激しさはあったが、柔らかさを内に抱いていた。丸く氷塊が溶かされて行く。もはや削りとられて行くという表現は当たっていないのかも知れなかった。

大氷原が、つき動かされ、いずこへともなく去って行くのに三日とはかからなかった。

氷片はただ、粉々にされてただ海面を漂っているだけだったから、もはや軌みの音も、怒りの声も失なっていた。

白岩由吉は、やがて自分の身の上にも春がやって来ることを信じた。鉄の枷は氷りついたように今も硬く、がっちりと手首に嵌り込んでいた。

が、執念の打ち壊しの行為で少しずつではあったが、止め金部分はバカになりつつ

あった。ごっつんごっつんと、もう何万回、床板に打ちつけたことだろうか。

「ああ、また、やってるな」

看守たちもそんな程度の思いしか持たなかった。絶対に破壊することのできない戒具だった。油断していたのではない。

人間の力で破壊することなど考えられはしないのであった。

入浴の手間が大変なことから、なしくずしに、彼の入浴日は取り消されたままになつていった。

いつか、吉峯老人の亡霊話も口の端にのらなくなった。四舎の通路に天窓から明るい光が昼間は入り込んだ。夜は、あの、様々な妖怪を連想させる流水鳴りの声が消えた。死人や、妖鬼、怪獣たちの魑魅魍魎（ちももうりょう）の跳梁跋扈（ちようりょうばつこ）の気配も消えて失くなった。

「いよいよ春だな、きのうの午後、オホーツク海の向うに蜃気楼（しんきろう）が出た。水平線の向うの空にな、白い大陸のよなものが浮かび出たよ。なんだか、白いビルのようなものも映っていた。夢か、うつつか、幻か、まったくあれは不思議なものだな」

野沢看守と顔を合わせるのは二週間ぶりだった。二十三号舎房での見張りの体制はもう解かれていた。

野沢看守が視察孔から眼を離し去ると、彼は「蜃気楼か」とひと言を呟やいた。自分がり遂げようとしている脱獄への挑戦

の行為も、もしかしたら幻の夢なのかも知れないと、弱気になった。この頑丈な鉄具の止め金を外したところで、あとはどうやって逃げるのか？まだ、その計画は完全には出来上っていないかった。

それに、隠し筒に隠してある針金の長さが少し短い。あと十センチほど長さが足りない。外から施錠する門状の把手を針金を巻きつけ、撥（は）ねるには、針金の長さが不足だった。

二十四号舎房を出たあとは、どちらの方向に足を向ければいいのか。舎房の端まで行けば、中扉の鉄門がある。

が、その扉の錠前を開ても、その向うには看守の仮眠・休憩所があるので、むしろ飛んで火に入る夏の虫となる。

逆の方向には中央見張所があった。

あとは：まだ、そこまで考えが及ばない。時期は、やはり秋口しかない。春から夏にかけては内地とちがい、北海道は収穫の時期とはならない。鮭が川を遡行（さつこう）して来る季節がいちばん望ましい。

。秋になると赤い衣を着た人が逃げる。それは通説だったが彼も逃げのびるためには、食糧確保を第一に考えねばならなかった。

。七回目の脱獄だ。五寸釘寅吉など小物だ。このおれが、日本でいちばんの脱獄囚になつてやる。

自分にはちゃんとした目的があるのだと、心が挫けそうになると言い聞かせた。心の高ぶりを失なったら、ただ、牢獄につな

がれただけの男になる。

彼の日課は、房内を四つの隅に沿って歩くことと、足腰を鍛えるために膝を折り、屈伸運動することだった。

季節が日に日に、暖かさをまして行くのに
勇気付 けられた。

もう凍傷を怖れることもないし、とつぜんの死を怖れることもない。

この冬も、眠ったまま、朝になると死んでいた受刑者が三人いた。ぽっくり病に似た症状で、雪野での行き倒れのように寒さに耐えられずに死ぬ。

心臓麻痺を起すのであった。

ある日、野沢看守が房内に入ってきた時、彼は、つまらぬことを口走ってしまった。

「もうはア、逃げたくども、こいだば駄目（まい）ねな。おらア、あきらめだじや」
「当り前じゃないか、逃げるなんてもう考えるな」

「だども逃げる時は担当さんの当番の日だばおらあ、逃げねおん。ずんぶ、お世話になつたはでな」

「おい、馬鹿なことを言うもんじやない。そういうことを言うからお前は手枷まで嵌められるんだ。他の担当なら、その場でビンタを食うぞ」

野沢看守は珍らしく怒った。なめるんじゃないと言った顔付きだった。

「冗談だでばな。だいいじこの手錠だば手首でも、切り落さね限り駄目（まい）ねべ
な」

もう、野沢看守は相手にしなかった。

この日の午後、とつぜん、若い看守がやってきて二十四号舎房を開けた。

「白岩、房を出ろ！」

いつもの口調だったが、彼はびくりとした。野沢看守につまらぬことを口走つたのを後悔していた。

つい、気を許してしまった。

気になっていたところに、出房の声が掛かったのだ。取調べられた。不心得をさとされるのか、それとも、もっと頑丈な、真暗闇の鎮静房にでも移されるのか。

若い看守はかなり緊張しているとみえて、怖い顔をしていた。怒り肩にもなっている。まずいことになった。大体が、四カ月以上も鉄枷はそのままになっているのだ。一度の点検もないということが先ず信じられないでいた。

野沢看守が、彼のさっきのことばを上司に報告していたとしたら、逃亡意志ありと判断されることだってある。いくら親切顔をしても、看守は看守だ、彼は野沢看守に裏切られたと、その時、ほぞを噛んだ。腰縄を打たれた。

「おい、どごさ行く？」

「まあ、いいから来い」ちよつとことばの調子がやわらいでいたので、安心したが、まだ心の不安は去らなかつた。

「ほんと、お前は熊みたいだな。二十四号舎房の穴熊だア」

迎えに来たもう一人の看守が言った。中

央見張所の方には行かなかった。その向うには、管理棟があり、呼び込まれると緑なことはなかった。が、入浴場のある方角に足は向いていた。

「おらあ、死ぬまで風呂さ入らねって決めだはんでなア」

「人手不足だ。そんな暇はないよ」

彼は、鉄枷のことばかりが気になっていたので。浴場の手前にある理髪室の前で、足は止まった。

「熊を飼っておくわけにはいかないから野沢看守が、散髪してやれって。そういうことだよ」彼はほっとした。

出房させられてからの数分間、様々な思いが頭を巡っていた。この二人の看守に襲いかかって逃げてやろうかとも考えあたりを窺った。

両手が自由なら、通路の壁をよじ登り、天窗にとりついてやるものと視線を天窗に釘付けにした。

だが、理髪室に入り理髪係の雑役夫の顔を見た時、やっと安心した。顔をしかめるほど、彼の体は臭い。垢と糞尿の匂いが入りまじり、強いアンモニア臭が鼻をついた。雑役夫は、稀代の脱獄魔を眼のあたりに見て、半ば感激の体だった。

鼻をしかめたりはしなかった。

こんなひどい仕打ちを受けているのに、超然としいる白岩由吉という男に、畏敬の念さえ抱いた。熱いタオルで、顔から首筋を拭いてくれた。とても気持がいい。

人間に返ったような気になれた。

ごしごしと顔や首筋をこすられるたびに、そばについていた看守が「これじゃまるで垢掃除じゃないか」と、言った。

髪の毛も髭も長いので、鋏で先ず、適当に切られた。ざんぎり頭にしてからバリカンを使った。頭の地肌にはふけが詰まっていたが、洗髪まではやってくれない。

いがぐり頭はまだらの汚ない頭になった。片刃の西洋剃刀があてられた。

じよりじよりと小気味いい音が返ってきた。なんだかわからない、人間らしい扱いを受けたことで、彼はちよつとした幸福感に酔っていた。

理髪室には鏡はない。

ガラス片は鋭角だから場合によっては兇器になる。そんな配慮のためだった。

だいいち、自分の顔をわざわざ見たいと思う受刑者など一人もいないはずだった。鏡は不用だった。

二十四号舎房に戻されてからも、この日は一日中、彼はご機嫌だった。

2

昭和十九年は、日本にとっては、負け戦さの道を決定的にした年であった。

南洋諸島に広げた戦線が、連合軍の逆襲に遇って、どこも、後退を余儀なくされていた。神風特攻隊が編成され、第一陣が出

撃したのもこの年のことで、さらに、十一月二十四日には、B29による東京初空襲が実行に移された。

刑務所の事情を記すと、特警制度の他に、軍事施設の建設、軍需物資の増産などが課され、構外作業の機会なども増えていた。昭和十七年五月九日には行刑局長名で、逃走事故防止に関する電信が各所の刑務所、拘留所長宛に発信されている。

「最近各所ニ於テ逃走事故ノ続発ヲ見ルハ戦時下国内治安確保ト行刑ノ威信保持上、洵（まこと）ニ遺憾ニ堪エズ 時局ニ鑑（かんが）ミ事故ノ防止ニ付万全ヲ期セラレタシ」

また、全国刑務所長会で行刑局長は「戦争下における一人の逃走は、行刑治安を完全に崩壊するものである」と逃走事故の発生を厳に戒めた。

『逃走予防対策要綱』が作られ、細部にわたる指示が為された。

その一例を引くと、

一、刑務所行政ノ第一義ハ 戒護検策ニ在リ戒護検策ノ完（まっとう）ヲ俟（も）ツテ初メテ処遇万般ニ及ブベキモノナルハ固（もと）ヨリ 自明ノ理ナルモ動モスレバ平素ノ無事ノ事態ニ馴レ 或ハ目前ノ事務ニ拘泥（こうでい）シ 本来ノ戒護ノ重要性ヲ軽視スルニ至ルノ虞（おそれ）アリ

一、逃走事故ノ発生ヲ以テ 刑務所ノ現状トシテ 已（や）ムヲ得ザル現象ナリト觀念スルガ如キハ 刑務官吏ノ心構エトシテ

最モ危険ニシテ斯（かか）ル觀念ノ潜在コソ戒護検策ニ於ケル弛緩ノ根源トナルベシ一、戒護職員ヲシテ絶対ニ逃走セシメズトノ信念ヲ持タシムベキコト 戒護充実ノ手段方法ハ種々アルベキモ 結局頼ルベキトコロハ戒護職員各自ノ精神カナリ 戒護ノ本義ニ対スル正シキ認識ト 強キ責任觀念ヲ有スル戒護職員全員ヲシテ 絶対ニ逃走セシメズト固キ信念ヲ把持セシムルコトコソ逃走防止策ノ根底ナリト謂（い）ウベシ一、戒護検策ノ要諦ハ収容者ヲシテ 乗ズル間隙ナシト觀念セシムルニ在リ 故ニ例エバ 検身搜檢ノ如キモ単ナル形式的施行ニ了（おわ）ルコトナク 緩急ヲ心得最少限度ノ要員ヲ以テ最大ノ効果ヲ狙ウベク常ニ工夫アルベキナリ（一部区切り改定）

など十数項目にわたる対策要綱が定められていた。

ぽんぽんぽんと発動機の音を立てて漁船が沖合いを目指す。

時折りは日本の飛行機が、空を飛んだ。爆音だけが戦いの現状を、白岩由吉の耳に届けた。

季節は夏を迎えようとしていた。すでにこの時、彼の頭の中には破獄行為の手順が描かれていた。

「あいつもとうとう、拘禁症になって頭が狂ったらしい」

そんなことをいう看守もいた。

ごっんごっん、時たま、鉄の戒具を打ち

つける音が陰惨な響きを伝えていた。

それにまじって、壁に脳天をこつんこつんとぶつける小さな音がした。

「なにをやっているのか」

看守に訊かれると、

「頭が、痒くてしようがねえべ。それに四十肩で肩さ、百会（ひやくえ）が凝ってしようがねえべさ。脳天はほれえ、百会つうて揉み療治のツボだべ」

大体が石頭で通ってきた。一升壇でぶん殴られたことがあったが、かすり傷一つ負わなかった。

すべてに頑健にできているのだった。

芯棒部分の止めの金具は、少しぐらつき始めていた。かしめの部分がこぼれ、先端が丸くなっていた。

もう半年以上もごつんごつんと床板に打ちつけてきたのだ。身を削られる思いだったが、芯棒は軟鉄だったから、ヤキの入った手枷の硬い鉄と擦れ合ううちに、歪められ、伸びた。つまり止めの金具は身を細らせていたのであった。

戒具の両端のボルトとナットはすでに弛み始めていた。ねじを切られたボルトの溝の部分が打ちつけ行為によってすりへり、ガタが来ていた。

六角形のナットは外す自信があった。ナット部分が上の位置にあつたので奥歯にはさみ何度も顎に力を加えた。鉄具は塩分によって錆びつき、脆い状態になっている。

すでに七月の終り、寒い最中に破錠行為

を始めて二百四、五十日が経過していた。

夜中でも、ごつんごつんと硬い音がした。優に五万回は越していた。

刑務所側が、破錠行為に結びつけなかったのは不思議だったが、一度だけ、野沢看守が不審の念を持った。

あまりに、執拗な行為だったからである。

五月の初め、実際に、野沢看守は鉄枷の止め金部分を点検しようとした。

まだ、かしめ部分にはがたつきはきていなかった。気付かれなかったかも知れないが、用心のためにまた止め金を新しいものと取り替えられるおそれがないとはいえなかった。彼は、野沢看守の注意力を散漫にさせるために、その時、意表をつくことを考えた。

「鬼の小塚が、この前、ちゃんと点検して行ったべさ」

「いつだ？それは」

「一週間前の当直の夜だべさ。地獄の鬼の顔に見えたべ。あのどぎ、おらの顔さあの鬼、ツバ吐ぎかげでいっただど」

「おい、オニ、鬼と、そういう言い方をするな」

「野沢看守は甘いはで、あいだば、看守はつとまらね、したはんで、おれが厳しぐすると、えばりくさったんだ。あれは鬼だと言われで、ここでは大きな顔してるんだ」

「ふーむ」

人の好い野沢看守も自分の悪口を言われ

て不興顔になった。野沢看守はちらと、止め金部分に眼をやっただけだった。

微妙な緩みの感じは嵌められているものでなければわからない。

「肩コ、腫れ上ってるべ、痛えってもんでねえ、手首んどごろで血が止まつてるだから、いつも、ぶつけでねと、両手が上にあがらなくなるだア」

「ほんとうは甘いわけじゃいな。罪は憎んで、人は憎まず、そういつも自分には言い聞かせているだけだぞ」

野沢看守は彼が作り出した話に少しこだわりを見せた。

「おらが、我慢できるのも、担当さんのお陰だア。なんぼかそれでえ、おらの辛い気持は救われているだか」

最後はちよつと泪ぐんでみせた。

「ほんどは、もう少し、弛めて欲しいんだ。所長さんに一度頼んでけねべが」

所長ともあるう者が、そんな頼みをきくわけもなかった。

「ああ、機会があったら話してみよう」

そうは言ったものの、野沢看守も頭の中では、ありえない話だと思つた。

この特別戒具が自慢の完全主義者の所長が一考するはずなどなかった。

真実、野沢看守は、白岩由吉に同情しているところもあった。

自分を苛める者には徹底抗戦の構えをみせるが、心を分け合ってみると、東北人特

有の純朴なところを見せる。長い拘禁生活だから、白岩由吉も性欲の吐け口をどこかに求めていた。便器に坐り込んだ彼は、前手錠の重い鉄枷なのに自慰に耽ることがある。たまたま、視察孔からのぞき、眼が合った時、彼はにと照れ臭そうに笑った。

「お前、まだ元気があるんな」

と、野沢看守は声を掛けた。

「ごごが腐つたら人間おしまいだべ」

野沢看守には彼が可愛く見えた。

小さい時に両親と別れ、苦勞して育ってきた境遇は自分とも似ていた。

野沢看守は札幌の出身だったが父親が五歳の時に病死し、母親もあとを追うように七歳の時に生活の過勞が崇つて肺病になり死んだ。

父方の伯父が魚の仲買商で、その仕事を手伝った。身欠き鯨などが主な扱い商品だったが、乱獲のために、北海道沿岸には鯨は寄りつかなくなっていた。

仕事がなくなつた。齡が三十二歳、三年前に網走刑務所の看守として採用された。みんな、白岩由吉の担当になるのを嫌つた。看守と対等の口をきく無期懲役囚は扱いが難しい上に、逃げられでもしたら、責任の一端はかぶらなければならぬ。

得になることなどなにもなかつたのだ。

だが、野沢看守は、白岩由吉が入所してきた時、特別に所長室に呼ばれ、硬面で対する小塚看守の相棒役を仰せつかった。

平の看守の身では所長室には余程のことが

ない限り、入ることは許されなかった。
自分の温厚さが買われ、特命を受けた時、野沢看守は大いに感激した。それだけに、白岩由吉とは、人情味をもつて接してきたつもりだった。

3

昭和十九年八月二十六日。いつもとちがって、網走の海が朝から騒ぎ始めていた。一足早い秋台風が訪れようとしていた。遠い海潮音だったが、彼は段々高まってくる波の勢いを聞き取っていた。

胸の鼓動もそれにつれて高まって行く。野沢看守は二週間の出張勤務で、二見ヶ丘の分監に行っていた。

三日前のこと、彼はあと少しで、鉄具の止め金部分が外れるという感触を得た。鉄具の裏のボルトの頭と鉄具の内に三ミリほどの隙間ができた。

寸分の隙もなく、これまでは、上と下の止めの部分は嵌っていたのであった。

鉄具は錆び、腐ってもいた。
荒々しく、床に叩きつけられ、もう、外れるにちがいないと思った。

両手が自由になれば：その日がもう近付いていたのだ。ただ、ひたすら彼は嵐がやって来ることを願った。

吉峯のお父ちやにまた一人問いかけた。

「ここまでおらを支えてくれたのはお父ち

やの魂がおらを守ってくれたからだべ」

呪文のようにただ口の中でぶつぶつと呟やいた。

この日、昼過ぎから、なお風勢は強まった。あの流氷の捻りの音を聞いて過ぎした厳寒期、彼は舎房内の物音を自然の荒れ様が消してくれることを知った。

破獄の条件には絶対に天佑が必要であった。わが身を彼は天に預けた。

しかも願いどおり、今夜の当直は小塚看守だった。直接の復習相手は小塚看守だった。野沢看守は二見ヶ丘分監勤務で、その間は小塚看守が責任担当として残っているはずだった。

風は夕刻を過ぎるとますます海の波を鋭角に切り始めた。

ひひゅーん、ひゅつと切れ込んでくる風音と共に、どどどーんっ、どんっ、どんっとな波が浜に寄せている。雨なのか、ここまで吹き寄せられてきた波しぶきなのか、獄舎の屋根が、ばちばちっとなつぶてに打たれた。荒れ狂っているすべてのものが、怒りの声をあげている、

白岩由吉は、もう、うおーつと外の闇に向けて咆哮したくなっていた。

闇に跳梁する一匹の魔獣、黒い影をもった生き物がふわりと天空に舞い上る―その、ひとときを、じっと待った。

十五分毎の視察が、三十分おきになるのは午後九時以降のことであった。

その時間が来るのを待っていたのだが、

氣持が逸（はや）った。ごっん、ごっん、と鉄具の底のボルトの頭を斜めに、えんじゅ槐材の角にぶつけた。

槐（えんじゅ）材の角はあちこちがへこんでいる。三ミリほどの隙間がある分だけ、ボルトの六角の頭は横に動き、そして鉄具の上部のかしめ部分の脆い広がり頭を無理矢理、斜め下にと引っ張った。

「かちやっ」と音がした。
軽い響きをもっている。かしめ部分のボルトはぐらぐらしていた。

両手首を持上げると、ことり！と音がして、鉛筆の軸より少し太い、丸い支え棒が床の上に落ちた。

だが、まだ鉄伽はくつついたままだった。両端にまだニカ所の止めのボルトが嵌っていた。六角のナットの一つを口にくわえた。きつと歯を立てた。顎の力は相当なものだった。歯の二、三本欠けてもかまわないと思った。

もうだいぶ弛んでいたので死力をふりしぼったら動いた。

一つ、とれる。もう一方のナットも同じ方法で外す。二つの、両端のボルトも外れた。が、錆びついているので鉄伽はまだ外れない。「これが最後だ」自分に言っかけて聞かせる。ごっんと鉄伽を床板にぶつけた。

手首から重い戒具が外れた。

大きな音を立てた。「きいーっ」と遠くで扉の軌む音がした。風雨の音にもう少しで聞きのがすところであった。

十五分毎の巡回の時間になっていた。

彼は慌てて、二つに分断された鉄枷をまた自分の両手首に噛ませ、床板の上に正座した。膝の上に鉄具をおいていた。

視察孔から覗いたのは小塚看守だった。

「こういう夜は逃げる奴が多い。今夜は特別警戒体制実施中だ。非番の者も召集が掛けられている。もつとも、その戒具じゃ、自分の頭を叩き割るぐらいしか方法はないがな」

その間、白岩由吉は身動きもしなかつた。節約のために、裸電球は十ワットに光度が下げられていた。

この時の、緊張し切った彼の異様な表情がもし眼に止まっていたら、たちどころに捜検となっていたことだろう。

だが、舎房内は薄暗い。

電球を背にしていたので、彼の顔の面は黒く塗り潰されていた。

ふーっと緊張の間が解けた。

視察孔の小さな窓から中の様子を窺っていた小塚看守の二つの眼が消えた。

足音は隣りの房にと移って行った。

非番の者も召集が掛けられている？

それがほんとうなら夜九時以後の時間をわざわざ待つ必要はない。

もう間もなく、午後八時三十分になる。

もちろんこれは彼の勘だったが、巡回時間の規則正しさから言っておよそ間違いはなかった。次の巡回時間までに完璧にやり

遂げる。そう決断した。

網走刑務所に入所して以来、四百九十一日目、鉄の手枷を嵌められてから、四百七十八日目となる。

風速はこの時、軽く二十メートルを越えようとしていた。ばちばちと強い雨が屋根を叩いており、裏山では樹の折れる音がした。遠くで人の声がしている。

滅多にこれほどの大型台風はやって来ない。網走の海は台風通過のコースではなかったが、手の空いている全職員が、先程から表でずぶ濡れになりながら塀や建物の壁の戸板打ち、倉庫などの資材置場の点検に走っていた。

鉄枷は再び解体された。

その鉄片の一つを持ち、木桶の便器を叩き壊した。一撃でばらばらになる。

彼は、鑿（たがね）を外す。

二重のねじれ状になった針金が手に入った。前々からこの手順は考えていた。

垢にまみれた獄衣を脱ぎ捨て裸になる。ふんどし一つになった。

獄衣に染みついた汗と糞便の匂い、それは彼にとって屈辱の匂いそのものだった。針金を手にし、木の扉に寄る。扉の前に立つ。眼の高さに鉄枠の入った窓がある。一番端の鉄枠を一本抜いた。

前々から、木枠に嵌め込まれている鉄棒を引き抜いておいた。

これも怪力を要する。手枷を嵌められた

ままの荒業であった。

発見されないように、鉄棒の穴には、自分の糞便を塗りつけ、木目の傷口がわからぬように偽装しておいたのだった。

それで、わけもなく鉄棒は一本抜けた。腕を差し入れる。鉄棒の窓は横幅が狭いから、頭は出ない。闇の中をそろそろと、針金の先が伸び、鍵穴を探り当てた。

軽便錠だから、錠開けの名人としてはさして苦労はしない。

ちっと、共調部分のばねをはねていた。だが、それだけでは扉は開かなかった。

手で操作する鉄製の円状の錠がついており、扉の開閉はまだ自由にはならない。

それも二重ロック式で、看守が扉を閉める時は、先ず、鉄製の丸棒を横に倒し、扉を塞ぐ。それから鉄製の大きな把手を左から右にと四分の三回転させる。

先に倒した横棒の先端に把手の一部が、かちっと嵌り込む。

つまり、完全に扉を開けるためには三段階の作業が必要なのだった。

長くて丈夫な、二重振（よじ）りの籠（たが）はこんな時、強力な武器になった。がちり締まった鉄製の把手を右から左にと、鉤（かぎ）型に曲げた針金の先に引っ掛け、持上げる。

止め金部分が外れると、かんたんに開いた。あとは横棒のロックだけだった。

手を一杯に差し伸べ、横棒を縦の状態に

戻した。ずっと押す。わけもなく開いた。

彼は、自分を苦しめ抜いた鉄具の片割れの一つを手にした。兇器になる。

鉄具は風呂敷に包んであった。

その風呂敷包みを、たすき状にし、腰に結びつけた。通路に出る。中央見張所が三十メートルほど向うに見えた。

人はいない。

暗いから眼につかなかつたのかも知れない。あらかじめ、寝具は人が寝ているように見せかけておいた。

たった今開けたばかりの扉の門錠をきちんと締めた。手にしていた鉄枷の片割れの一つは舎房内に捨てる。

襲う敵はいなかった。

もう次には身を翻していた。

自房の扉に外からとりつき、門扉の出っ張り部分に足を掛けると、その上の鉄枠の嵌った上窓下の出っ張り部分に足を掛けた。天窓を見る。

通路からだと三メートル余の高さ、上窓の位置からだと一メートルと少しであった。彼は横歩きの態勢で上窓の出っ張り部分にとりついた。

そこを足場にして、さらに進み、暖房用ストーブの煙突のある位置まですすんだ。通路にあるストーブは夏期のこと、無用になっている。煙突はブリキ板ではなく、薄い鉄板が使われていた。

その煙突は下から天窓を貫いて外に突き

出ている。彼は上窓から、木を渡る猿（ましら）のようにその煙突に飛び付いた。

煙突には一本添木がつつかえ棒の代りをしている。両手と両足でしつかりと円型のものを掴みとり、木登りの要領でぐいぐいと天窓を目指した。

腰に巻いた鉄具の片面が重い。

何度かずるとずり落ちそうになったが、渾身（こんしん）の力をふりしぼった。蜘蛛のように煙突の添木に張り付いた。

天窓の棟木に手が届いた。

梁にも足が掛かった。身をかまし、逆さまに近い状態で天窓にくらいついていた。

片脚を伸ばし棟木で体重を支える。

厚いガラスが雨に打たれていた。一センチ五ミリはある。

頑丈な棟木が組まれていた。

秋田刑務所の鎮静房の天窓とは比較にならない。ブリキ製の手製鋸（のこ）ではとうてい歯が立たない代物だった。

先ず、彼は天窓に頭付きをくれた。

びくともしない。

天窓のガラスを破るために、彼はこれまで脳天をこつこつと床板や壁にぶつけてきた。人間の力で、厚いガラス窓を破ることを考えていた。意地だった。

二度、三度と試みる。

やはり、脳天がくらくつとするだけでガラス板は割れそうにない。時間がない。

脱獄を見事にやっつてのける、そのために

考えた頭突きの方法だった。

胸のところに固定してある鉄片を取り出す。今度は敵の与えてくれた武器で、ガラス面を叩き割った。三メートル余の高さから、ガラス片が砕けて落ちた。耳を塞ぎたくなるような凄まじい音がした。

風と雨が一気に吹きつけてきた。

もう、白岩由吉は、天窓の上に体をのり出していた。

四舎房の受刑者たちは、時ならぬ破壊音に全員がはね起きたに違いない。

まして看守たちの耳に、あれだけの破壊音が聞えぬはずはなかった。

彼は風で吹き飛ばされそうになった。

瞬間風速二十五メートル、屋根に這いつくばってすすむ。四舎房の一番端、中央見張所とは反対の方角に向う。

樋（とい）があり、屋根の場所から地上にと排水管が降りていた。

それを足場に地上にと降り立った。

真暗闇で、びしっびしっくと雨が横殴りに吹きつけ顔の頬にあたる。痛い。

もう鉄片は捨ててきた。

自分をがんじがらめにし、苦しめたあの鉄片が、最後は自分を救ってくれた。

恰好の破壊道具になったのであった。

だが、まだ刑務所の構内だった。

あの、高い、五メートルもある塀を越えねばならないのであった。

がむしやらに塀に向って突き進んだ。

台風のための非常警戒が掛けられているとしたら屋外にも看守たちは居たかも知れない。彼は塀まで辿り着くと、材木工場を指した。

塀を越えるには、秋田刑務所の時と同じく、材木を用いるしかなかった。

ガラスを叩き割ってから三分ほどが経過して、天窓の一部が破損されたのを看守が発見したのは午後八時三十九分だった。

発見までに一分三十秒が実際には経過していた。最初に発見した看守も、台風の被害だと考えた。

風速二十数メートル、こんな暴風雨に遭遇したのは久しぶりのことであった。

小石だつて、看板だつて、金具だつてこの風なら空を舞う。

その、破損されたガラスの穴が、脱獄囚の開けた穴だとはだれにも信じられないことだった。

が、保安課長が異変を聞いて駆けつけてきて、四舎房の総捜検を命じた。

小塚看守は真つ先に二十四号舎房の扉を開けた。きつちり門錠は閉まっていたが、鍵穴は開錠の状態だった。

「しまった！」と思つた。

「おい、白岩！起きろ！」

いきなり、ふとんを蹴飛ばした。

なんの手応えもない。

その中には鉄具の片割れ部分も投げ入れられていた。

「やられた！白岩が逃げた！」

通路に飛び出すなり、呼子笛を吹いた。

白岩由吉が天窓を破った時刻から、すでに数分が経過していた。

この時、白岩由吉は、赤い塀の上の笠石の上に立っていた。

落葉樹の丸太を塀にさしかけ、一気に赤い塀に辿り着いた。笠石というのは塀の上に並べられたコンクリート塊の石である。彼は丸太を引き寄せ、今度は、外塀の下の溝にこの渡りの棒をつき立てた。棒を伝って降りる。地上に足がついていた。

高い煉瓦塀が眼の上にあつた。

眼が開けられていられないほどの強い雨が天上から降り落ちていた。

頬に雨粒が伝わる。

彼の顔は泣いているように見えた。

逃走経路を隠すために、溝の中に丸太を捨てた。刑務所の裏山を目指す。

小高い丘の中腹には高見張と呼ばれる櫓（やぐら）仕立ての監視哨があり、銃に実弾を装填（そうてん）して警備につくようになっていたが、人手不足の折柄、そこは無人となっていた。

網走刑務所の脱獄囚は絶対に、街のほうには逃げない。美幌方面か、サロマ湖の方向の山中を目指す。

東側はオホーツク海となる。

街では、発見される危険が大であるからだ。脱獄を果した者は、一メートルでも遠

くにと走り出すのが常識である。

だが、彼は刑務所のすぐ裏山の北山墓地への坂道を駆け上った。

土砂降りの雨と、体を持って行かれそうな突風、ばしばしと低木樹が彼の素っ裸の体を打った。痛い、もはや、それは快感に変わっていた。

北山墓地は平らな台地になっていた。

真暗闇である。

唐松林が吹き千切れそうになってびゅーびゅーと鳴っていた。

なにか怖ろしい光景でもある。

慰霊塔の石塔が二つ、並んでいるのが眼が憤れると見えて来た。

「お父（ど）ちゃ、おらがお父（ど）ちゃごと、シヨツペイ河の向ごうさ、連れでけえってやるはんでな」

それは獄中であって固く心に誓ったことであつた。彼は北山墓地の敷地内に立っていた。苦しみに喘いでいた時、彼はいつも吉峯老人に一人語りかけてきた。

挫けそうになる気持を支えてくれたのは、吉峯老人にほかならなかつた。

墓石の並ぶ一郭から離れた場所に土饅頭が一つあり、木の墓標が立てられていた。

この北山墓地は、職員と受刑者の両方が一つの場所に葬むられている日本でもただ一つの墓地であつたが、ぼつん一つだけ隅の場所にある土饅頭はいかにも淋しい。

身寄りのない、捨てられた者のそこは死

に場所であつた。

遠くに、官舎の明りが望めた。

慌しさが手にとるようになつた。

特別呼集が掛けられているのだろう、明りの数が増えていた。

雨しぶきの向うに明りがぼわと霞んで見える。一度土葬にされたあと、あらためて一年後に茶毘（だび）に付す決まりだつた。一部は慰霊塔におさめられる。彼は夢中で土饅頭の土を手で搔いた。

吉峯老人の焼骨を身につけて、飛ぶつもりであつた。一塊りになつたばらばらの骨を探り当てた。

「お父（ど）ちゃ……」

雨の雫がぼたぼたと顎を伝つて流れる。

雨礫だけではなかつた。

彼は吉峯老人の骨を握りしめ一泣いた。

「うおーっ」と声を上げ号泣した。

顔も覚えてはいなかつたが、三歳の時に亡くした父親の栄三、それに、少年の頃に八甲田山で会つたマタギの源蔵という男の顔が、この時、次々に思い浮かんだ。

暗い唐松林が今にもなぎ倒されんばかりに痛めつけられていた。

ばしんばしんと小枝の折れる音もした。

暴風雨の真只中で、白岩由吉は、いつまでも、同郷の男の土饅頭の上に坐り込んでいた。

白岩由吉が、煉瓦塀を越える時に使用した丸太が発見されたのは夜が白々と明けようとする午前四時すぎのことであった。

あれだけ荒れ狂った雨台風なのに、夜半にはぴたりとおさまった。

台風一過のあとの夏の朝は明るい。藍色に染められ、そして、やがて透明の朝の輝やきが、截然（せつぜん）と、五舎の脚を伸ばした網走刑務所を、この世に浮かび上らせた。

オホーツクの海も、波こそまだ高かったが、きらきらと輝やく海に変えられていった。未だかつて、網走刑務所の五メートルの赤煉瓦塀を越えた者はいないのだ。

川合所長以下、全職員はただ色を失なった。脱獄された事実だけでなく、明らかに過剰な戒護対策をとってきた。

人権上も問題のある苛酷な取扱いをしてきたのであった。

それに、前の秋田刑務所からの脱獄の時は、秋田から東京・小菅刑務所まで三カ月かけて歩き、待遇の違法性を訴えに自首して出た。今度の特別戒具使用は秋田刑務所の比ではない。法律を曲げて敢て使用したものである以上、同じ術を使われたら、川合所長は責任を問われることにもなる。

二十四時間以内は刑務所に脱走犯人の捜査権はある。刑務職員だけでは数が足りないから、警察にただちに通報、協力を要請すべきではないかの意見も出たが、川合所

長はおさえた。

刑務所には刑務所の面子（めんつ）というものがあるのであった。

塀を越えられるはずはないとはじめは考えた。小塚看守が、視察孔から白岩の姿をみとめたのが午後八時十七分頃、天窗の採光ガラスの破損を発見、白岩の脱獄を確認したのが午後八時四十一分頃であった。

天窗の破損は音を聞いてから駆け付けたのだから破損確認の午後八時三十九分から四十一分までわずか二分間、破損から発見まで一分程度と見たから、結局、逃げてから三分、いかに身の軽い白岩でも、塀を越える道具を用意して、それを利用し、外に出るなど考えられないことだった。

まだ構内に潜伏していると刑務所側は判断した。それで、朝の明けるまでしらみ潰しにあちこちを探した。

構内で捕まれば、外に脱獄の事実を知られなくともすむ。

結局、徒労に終り、外回りに切りかえたら、溝に捨てられていた丸太が見つかった。ほんとうなら足跡がついているはずなのに、雨量が多かったため、狭い溝からも水が漏れ、彼の足跡は完全に消されていた。

ただちに、刑務所側は、裏山から内陸方面に逃走したものと見て、新たな配置、捜索体制をしいた。

だが、からりと晴れた青空ばかりが眩しい一日が無為に過ぎた。

一日に山中を四十里踏破する脚力を持つ

白岩由吉のことだから、すでに能取湖あたりから常呂（ところ）を経てもうサロマ湖方面に脚を伸ばしているかも知れなかった。山狩りの対策も練ったが、サロマ湖あたりまで足を伸ばしてたとすれば手の打ちようはない。しかも、これからは秋の穫り入れの季節、山中でも生きのびられる条件は揃っている。

結局、網走刑務所から、警察に搜索権は移った。二日目の夕刻になって、近くの漁師小舎から衣服類が盗まれているのがわかった。家人は漁に出っていたので盗まれているのを発見したのが遅かったのだ。

それで近郊潜伏説も出た。食糧が盗まれているのも報告されてきた。

再び山狩り説が出た。

三日目、刑務所側が衝撃を受ける事件が発生した。白岩由吉は復讐心に燃えていた。北山墓地の裏山を定住場所にして潜伏していたのだが、三日目の夜、雑木林沿いに歩き、刑務職員の官舎の見える場所に姿を現した。官舎は刑務所の一番奥まった場所にある。彼の狙いは、小塚看守であった。

一撃見舞わなければ腹の虫がおさまらなかつた。ほぼ一年半にわたり苛酷な仕打ちを受けてきた。自分の一番近くにいる者を憎悪の対象にする、

それは弱い者の論理であつたが、彼もまた小塚看守を当面の敵として選んだ。一矢報わねば、口惜しい思いは消えなかつた。

何度、小塚看守の罵詈雑言（ばりぞうご

ん)に、じつと耐え、歯ぎしりしたことから。大胆不敵にも、彼は山を降り、暗闇に包まれた職員宿舎の木造家屋に近付いた。

午後十時は過ぎていたろう。

月のない闇夜であった。

同じ造りの建物ばかり、どの家が、小塚看守の住居なのかはわからない。

建物の陰から陰へと身を翻した。

武器は手にしていなかった。素手で立向う気だった。柔剣道の段を持つという小塚看守の股間を蹴り上げ、腹に一発、息もつげぬほどの強烈な一撃を打ち込んでやろうと彼は考えていた。

長屋造りの棟は暗かった。

彼は一軒、一軒、表札をたしかめるために、軒端(のきは)に寄った。危険覚悟の行為だった。三つめの棟の表札をうかがっている時、人の足音を近くに聞いた。

ごみ箱の陰に身を潜めた。

足音はこちらにやって来る。

音を立てぬように爪先立ちの歩様で走った。棟の角を曲がる時、ふと後を向いたら暗さの向うに男の影があった。

あとは一目散に裏山に駆け上った。

表札をうかがっていた男のことはすぐに搜索本部に報告された。

一旦、裏山に逃げてから、山を迂回し、今度は刑務所の反対側になる、網走市街北西ニキロの向陽台地にと駆け上った。

この丘に上ると網走市街が一望できた。雑木林に囲まれていた。

この場所は減多に人が来ない。

少し丘を下れば、網走刑務所も視野の中に入れることができた。向陽ヶ丘には測量基準点となる三角点の測量器械設備の建造物があった。これは国家基準点と言われ、標識となる石が地表に埋めてあり、地図の測量などの基準点の一つとなる。

石標の近くには、測量器械室のコンクリート造りの無人の建物があった。

この時点でまだ、白岩由吉は、小塚看守襲撃をあきらめていなかった。

何日間が経てば、山越えして遠くに逃げたと刑務所側は考えるだろう。

その隙をつく。

あの、小塚という大男が、真蒼になり唇を震わす姿がどうしても見たい。

三角点の器械室には鍵が掛けられていた。針金で鍵穴の共腹部分をはねた。器械が格納されていたが、奥に人間一人が背をかがめて入れるほどの場所があった。

夜のうちに、青草を持ち込み、寝床代りにコンクリート床に敷いた。

それから、天都山の裾野を巡り、畑の根や、とうもろこし、それに農家の蔵に入つて麦や米を盗んだ。

ここで二日待つことにした。何百人、何千人、山狩りの連中が来たつて逃げ了せる自信はあった。あわてず、騒がず、彼は自分に言い聞かせた。大体が、山狩りしないということとは、それが無駄なことだと捜索隊が考えている証拠だった。

原野のままのまわりの地理環境を考えれば、蟻を一匹捕まえるに等しい、それは大事（おおごと）だった。

搜索本部は内陸方面への逃亡説だけに片寄っていたのではない。近郊潜伏説の少数意見もあるにはあった。

執念深い、白岩由吉の性格から再度、小塚看守宅への襲撃はあるとする意見も出された。小塚看守は自分が当直の夜に、逃亡されたことで責任を感じ、搜索隊の先頭に立たせてくれと頼んだが、二見ヶ丘分監に緊急避難させられた。

午後九時、官舎の明りはほとんどが消された。刑務所側は、白岩由吉を誘き寄せる作戦をとった。暗闇に紛れて、再度やって来るのではないかと、網を張って待ち受けていた。一度やる、と決めたら白岩由吉は絶対にやる男だった。

まんまと罠に嵌ったことになるが、山中を迂回し、官舎裏の雑木林の闇に身を潜めた。静かで物音一つしない。人の姿もない。猫足で、闇の中に歩をすすめた。

大体当りをつけていた。

前回は三分の二は見て回ったのだ。北の隅の官舎には二軒、明りが灯っていた。

他の棟が暗いのをよく考えれば、罠だと気付くかも知れないが、彼の目標はただ一つ、悪鬼の形相の男の顔しかなかった。

すすすすと擦り足ですすむ。

その時、どこかで人の動く気配がした。わずかの風の揺れだった。彼の動物的な勘

は、危険を察知した。

さっと踵（きびす）を返した時、ピーツと呼子笛が鳴った。

一目散に雑木林に駆け込む。

袋のねずみになるところだった。

雑木林から近付いてくるだろうと読まれていたから二十人ばかりの看守たちが暗い闇に紛れていた。

が、暗い闇には眼が慣れていた。脚力もちがう。二、三人、彼の前に立ちはだかつたが、「うおーっ」と腹の底から威嚇の声をあげると、人の影は割れた。

さっとその闇の間隙を抜けた。

ばたばたと彼を追う足音がしたが、すぐに跡絶えた。

この夜、警察の車らしいものが、街中をあちこちと駆けるのが見えた。

道路の封鎖、検問所を設けるために、人員の配置が行なわれているのだろう。

天都山の中腹から、捜索隊の動きを高見の見物をしてから、彼は三角点の隠れ場所から姿を消した。派手に周囲の農家から着衣や、錠、食糧などを掻き集める。

白岩由吉が、網走の山中から姿を消したその翌日の午前八時から大々的な山狩りが実施された。軍隊も動員され、陸軍中尉を指揮官に兵隊が二百名、三八式陸軍小銃には実弾も込められた。

警察官、警防団、在郷軍人会、青年学校の若者など、鎌や、竹槍、斧、まさかりを手に使っていた。熊狩りに出るような騒ぎだ

った。総員二千名、双手に別れ、むしろ旗を押し立てての行進、百姓一葵の決起集団のようにも見えた。騎馬に乗った将校だけが、一人、さつそうとしている。

最終合流点、向陽ヶ丘の三角地点に、両隊は午前十一時すぎに山狩りを了えて到着した。脱獄囚の影すらつかめなかった。

白岩由吉はこの時、すでに北見盆地側の山中に身をおいていた。

一晩中、網走海岸沿いに走った。

明るくなってから山中にと身を転じたのであった。

彼の懐には、吉峯老人の焼骨が一つ、しっかりとしまい込まれていた。